

地質－5 ハチノスサンゴ



ハチノスサンゴは床板サンゴの仲間^{しょうばん}で、サンゴの個体が多角形の断面をもつ管状^{くだじょう}をしており、それらが連結して群体を形成します。その横断面^{おうだんめん}が蜂の巣^{はちす}に似ていることからこの名前がつきました。ハチノスサンゴは古生代オルビドス紀に出現し、シルル紀～デボン紀にかけて大繁栄^{だいはんえい}し、サンゴ礁を形成しました。ハチノスサンゴは、他の床板サンゴ類のクサリサンゴや日石サンゴとともに五ヶ瀬町祇園山石灰岩から産する

代表的なサンゴの化石で、大型の化石としては日本でも最も古い部類に入ります。祇園山のサンゴ化石は赤道付近の低緯度地域にあったサンゴ礁がプレートの動きによって移動し現在の五ヶ瀬町にやってきたものと考えられています。ハチノスサンゴを含む床板サンゴ類は古生代末（ペルム紀末）に絶滅しました。